デッド・エンド

山田正紀

デッド・エンド

山田正紀

奇想天外社

山田正紀（やまだまさき）

1950年　名古屋市生れ。
明治大学政経学部経済学科卒業。
著書に『神狩り』（早川書房）
『弥勒戦争』（早川書房）
『火神を盗め』（祥伝社）
『地球・精神分析記録』（徳間書店）
『チョウたちの時間』（角川書店）
など多数がある。

著者　山田正紀
©1980 Masaki Yamada
発行者　千頭俊吉
印刷所　有限会社誠宏印刷
製本所　ナショナル製本

発行所　株式会社奇想天外社
東京都新宿区赤城元町28番地
電話　(03) 268—8617, 268—8653
振替　東京 3-100293　郵便番号162

乱丁・落丁本はお取かえします　〈編集担当　近藤清美〉

デッド・エンド

全世界が、人も神ももろとも終末に滅びることになるだろう。それがいつ起こるか。神々はあらかじめ知っていた。途方もない出来事が迫っていることを多くの予言や、前兆が告げていたからだ。

エッダ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

1

――イーグはこの世が始まるまえの霧のなかに浮かぶ赤子のことを語る。イーグほどその赤子のことをよく知っている人間はほかにはいない。

世界には光もなければ、熱もなかった。地もなければ、空もなく、波のこだまする海もなかった。象もなければ、影もない灰いろの霧のなかに、赤子はただよい、まどろみ、世界創造の夢をみていた。

十億の都市、百億の海、千億の星……世界創造の夢に果てはなく、赤子はいつしか夢をみることに倦み疲れ、ついにその眼をひらいた。瑪瑙の玉が砕けちるように、十億の都市、百億の海、千億の星が消え失せた。

赤子は眼をひらき、自分が空腹であることに気がついた。さむく、一人ぼっちであることに気がついた。そして、赤子は泣きはじめた――だが、世界には光も、熱もなく、赤子の泣き声を耳にする者もいない。地も、空も、赤子の口に乳首をふくませる母親もいなかった。

赤子は泣きつづける。灰いろの霧のなかに浮かび、あまりの孤独におびえ、いまだかつて存在したことのない母親をしたって、泣きつづける。そして、赤子の頬をつたって、ひとしずくの涙がしたたりおちる。

赤子の泣き声を耳にし、その涙を熱い掌で受けとめたのは時間だったと伝えられている。その涙は、最初の素粒子だったと伝えられている。

時間は赤子の泣き声に我慢できない。自分が支配すべきはずだった十億の都市、百億の海、千億の星が消え失せたことに、いたく失望する。なんとか赤子を笑わせることができないものかと考える——そして、ついに時間は走りだす。この世が始まるまえの霧のなかを走りだす。それから、掌であたためた涙を鞠のように、たかく、霧のなかに放りあげたのだ。

涙はたかく、たかく昇っていき、しだいに熱をおび、光を放ちはじめた。はるかたかみに昇りつめた涙は、そこでいったんとまり、クルクルと回りながら、ふたたび時間の手のうえに落ちていった。

赤子は泣きやんだ。だが、笑わない。大きくふくれあがった涙をうけとめた時間は、またその涙を放りあげた。赤子が笑いだすまで、機嫌をなおすまで、時間はなんどでも涙を放りあげる。時間の手にふれるたびごとに、涙は大きくひろがっていった。

時間は走りつづけ、涙を放りあげる。さて、この遊びに、いつからかもうひとりべつの人物が加わるようになった。その人物は重力という名で呼ばれていた。時間と重力は並んで走り、たがいに涙を投げ、受けとめ、また投げた。重力の手にふれるたびに、涙はまだらになっていった。したがって、涙はもう涙ではなく、宇宙という名で知られるようになった。

時間と重力はいまだに宇宙を投げあっている。だが、赤子は笑おうとしない。泣きもしないが、笑いもしない。宇宙がふくれあがっていくのを、星雲や星団がつくられていくのを、ただみつめているだけなのだ。

いつからか、宇宙を投げあうふたりの足元に、ひとりの男がうずくまっていた。男はみずから無

と名のり、頭上を往復する宇宙を視線で追いながら、つねに口元に嘲笑を浮かべていた。
「その宇宙はわがものぞ」
無はせせら笑い、声をかける。
「赤子が泣きたるのも、わが衣あまねくこの世を覆いたればこそ……すべては無に発し、無に帰する。余の力なかりせば、赤子を産ましめること能わず。ましてや赤子の涙、宇宙など、わが支配なかりせば、この世に誕生する道理もなし……心せよ。すべては無に発し、無に帰する。無に帰する…」
無はその黒い衣を翼のようにはためかせ、哄笑する。宇宙をその手に収めようと、青白い腕をさしのべる。そして、いう。
「時間よ。わが同胞よ。汝、いかに宇宙をはぐくみ、愛しもうと、ついにわが力におよばず。なんとなれば、汝、いずれはわが軍門に降る運命にあるによって」
時間と重力はしだいに疲れはじめている。しかし、宇宙を投げあうのをやめるわけにはいかない。宇宙が静止したときには、赤子が泣きだすにちがいないからだ。そして、こんど赤子が泣きだせば、その泣き声をしずめることができるのは無しかない。無は宇宙を均質な、冷いかたまりにかえ、赤子を永遠の眠りにつかせようとするだろう。それが、終末である。
時間と重力はそうならないために、宇宙を投げあっている。だが、彼らは知っている。このままでは、いつの日か疲れはててしまい、宇宙を無の腕におとしてしまうことを……だから、時間と重力は宇宙を投げあいながら、救けを呼んでいる。救けが現われるかどうかは、まだ誰にもわからない。その兆もみえないからだ。
だが、イーグは断言する。時間と重力を救ける者の名は螺旋でなければならない。なぜなら、螺

旋こそ宇宙を統べる究極の力、赤子をはぐくむ母親であるのだから。

——暖炉があかあかと燃えている。

天井の垂木にはイルミネーションの豆電球がはりわたされ、赤や青の明かりがチカチカと点滅している。黒ずんだ壁材には、白いペイントがふきつけられ、Merry Christmas の文字があざやかに浮かびあがっていた。

そして、部屋のまんなかにあるドッシリとしたテーブルには、ポータブル・プレーヤーがおかれてあって、そこからビング・クロスビーの歌う〝ホワイト・クリスマス〟が流れていた。

いかにも居心地のよさそうな部屋だ。

天井がたかく、ちょっとした吹き抜けのようになっている。さほど広くはないが、中二階に通じる階段が、この部屋に奥ゆきを与えている。内装にはすべてくすんだような色のチーク材が用いられ、それが暖炉に燃える火を反射して、一種なつかしいような雰囲気をかもしだしていた。

壁には、十九世紀の象徴主義風の絵が何枚かかけられ、中二階の床下の、うすぐらい森のような空間には、立体画像の地球が緑いろに浮かびあがっていた。それ以外には、およそ装飾らしいもののない、単純な、それでいてどことなく繊細なものを感じさせる部屋だった。

〝ホワイト・クリスマス〟が終わった。針がレコード盤をこする音が、なんだかため息のようにうつろに部屋にひびいている。シューッ、シューッ、シューッ……

プレーヤーのうえに人影がさした。指がアームをつまみ、ターン・テーブルの回転をとめた。レコードが裏返され、ふたたびターン・テーブルが回転をはじめた。こんどは〝赤鼻のトナカイ〟が流れ

だし、ビング・クロスビーの陽気で暖かな声が、壁にはずみ、わんわんとこだました。

そのまま、ゆっくりと籐の丸椅子に体をしずめたのは——若い女性だった。

痩せぎすの、鋭角的な顔だちをした女性だった。肌はあさぐろく、頬骨がつきでていて、その薄い唇に血の気はとぼしかった。それでもなお、彼女を十分に美しくみせているのは、その黒くながい髪と、ややつりあがった眼が、いかにも魅力的だったからだ。彼女のとおい先祖に東洋人がいたのはあきらかなようだった。

彼女の名はルー、民族学を専攻する女流学者で、年齢は——年齢は彼女自身にもよくわからない。外見は、また自分の実感としても、二〇代の後半というところだが、じっさいには幾つになるのか、あまり考えたこともなかった。

ルーは籐の丸椅子に腰をしずめ、顔のまえで両手を三角形に組み、その手のかげから、なんだか熱にうかされたような視線を前方に向けていた。そして、レコードにあわせ、わずかに首をふりながら、自分も〝赤鼻のトナカイ〟を歌いはじめた。かぼそい、やや躁的なものを感じさせる声で、そのまましばらく歌いつづけている。

やがて、〝赤鼻のトナカイ〟が終わり、曲は〝サンタクロースがやって来た〟にかわった。ルーの眼にいらだちの色が浮かび、口のまわりにかすかにしわがよった。どうやら、この曲は彼女の好みではないようだった。

ルーはやおら腰をあげると、テーブルに向かって歩いていき、レコードをとめた。それから、なんだかためらいがちに、テーブルのうえにおかれてある写真を手にとった。ちいさな女の子の写真だった。女の子は嬉しそうに笑っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ふいに顔をそむけるようにして、ルーは写真をテーブルにもどした。そして、やはり同じテーブルのうえにおかれてある細長い箱に、ソッと指をはわせた。だれかへのプレゼントらしく、箱はきれいな紙で包装され、金いろの飾りヒモがかけられていた。

ルーはウットリとした微笑を浮かべながら、その箱をくりかえしなでさすっていた。なんとなく、精神の荒廃をうかがわせるような微笑だった。

なにかの拍子に、ルーのひじが写真を収めたフレームに触れた。写真は床に落ち、ガラスの割れるするどい音がきこえてきた——ルーはその場に立ちつくし、しばらく写真入れをみつめていた。女の子の顔を中心にして、ガラスに放射状にひびが走っていた。女の子が割れたようにみえた。

ルーの顔は蒼ざめていた。そのみひらいた眼が病的な緊張をはらみ、唇がわずかに震えていた。いまにも大声で叫びだすのではないかと思われるぐらい、精神的にギリギリまで追いつめられた女の姿が、そこにあった。

ルーの体からフッと力が抜けた。なにか糸の切れたようなもの憂い動作で、彼女はボンヤリと部屋をみまわした。

「わたしってバカみたい……」

口のなかでつぶやいた。「かんじんのクリスマス・ツリーを飾るのを忘れていたわ」

彼女はひどく大儀そうに、外出の支度にとりかかった。耐寒コートのフードをかぶると、もういちど写真に視線を走らせ……そして今度こそふりかえりもしないで、部屋をゆっくりとでていった。

——黒と、白と、灰いろの世界だ。

巨大な波のように、はるか頭上で反っている崖面は、急勾配をなし、視界を一面に覆っている。斜面には大小の玄武岩がつらなり、泡だつマグマをみているようだ。そのおびただしい数の岩をめぐって、岩屑と泥と雪がまだら模様をえがいていた。

ここしばらく雪は降っていなかったが、岩陰には雪のふきだまりが残っていた。泥と混じった雪は汚らしい灰いろで、新雪のあの純白のかがやきなど望みうべくもなかった。まったく、みているだけで気持ちが滅入ってくるような光景だった。

この地で、かろうじて色彩の名に値するものといえば、岩にこびりついている褐色のコケだけだった。そのコケさえもうす汚れて、なんだか恨みがましくさえあるようで、なおさら風景を陰うつなものにみせていた。

すすり泣きに似た風の音が斜面にこだましている。崖面をえぐる氷河侵食、あばたのような無数の隧道が、つよく吹きあげる上昇気流に共鳴し、獣みたいな甲高い鳴き声をあげるのだ……それは、凍ついた大気にしめつけられた風景そのものが、あまりの苦痛に、全身をふるわせて泣き叫んでいるようにきこえた。

いま、零下三〇・五度……そらおそろしくなるほどの低温だが、それでもこの地においてはまだましたほうなのだ。しだいに陽がかげっていくにつれ、気温はさらに、しかも急速に低下していく。じっさい、どこまで下がるか予測もつかないほどだった。

ルーは唇をかみしめ、ときどき両手で体をはたきながら、一歩一歩ふみしめるようにして、斜面を登っていく。慎重なうえにも慎重であらねばならない。凍結土に足をすべらせでもしたら、それこそ地の底まで落ちていくことになるからだ。

すぐれた断熱材、防水性を誇る耐寒コートに、頭からつま先までスッポリ包まれていても、吹きつけてくる風はやはり冷たく、氷の針を全身に埋めこまれたように感じた。

ルーはようやくテラス状につきだした岩場に到達した。寒さがいちだんと厳しさを増したようだ。息を吸い、吐くたびに、氷にひびが入るような、するどい、繊細な音がきこえてきた。

すぐ眼のまえにそびえたつ岩壁に、洞穴がポッカリとあいていた。洞穴はくらく、いかにも狭そうだったが、眼をこらし、耳をすますと、奥のほうで燃えている炎の明かりがみえ、だれかがささやきあっている声がかすかにきこえてくるのだった。

ルーは辛抱づよく洞穴のまえに立ちつくしていた。体の芯まで凍らせる風にさらされ、そうして立っていると、自分が地の果てに一人とり残されたような心細さをおぼえた。隧道を走り、岩をかむ風音が、自分の泣き声であるかのような錯覚にとらわれるのだ。

やがて、洞穴の奥のほうから、白く、大きな影が浮かびあがってきた。イーグが姿をみせたのだ。イーグはいつもながらにものしずかで、強靱な、しかしおだやかな知性をたたえたその眼の光にもかわりはなかった。

「私はおまえに教えられた輪廻のことをずっと考えていた」

イーグがしずかな口調でいった。

「生まれかわり、滅び、また生まれかわり……そして、いつの日か解脱する。涅槃の境地に達する……たしかに、この世で完全に滅びてしまうものはない。物質はエネルギーにかわり、エネルギーは新たな生命を産む。その意味で、万物は輪廻する。ゆるやかに、この世をめぐっていく。輪廻……いい言葉だ」

ルーはとっさにはイーグの言葉を理解できなかった。単調で、孤独な、そう、やりきれなくなるほど孤独な毎日が、ルーの記憶を奇妙ににぶいものにしているようだった。とおい昔のことははっきりと想いだせるのに、きのうの記憶はもうすれはじめているのだ。

「だが、煩悩という概念がどうしても理解できない」

イーグはおだやかに首を振った。

「煩悩とは〝生存するためのあがき〟を指しているのだろうか。だとしたら、そのあがきから逃げだそうとするのは不可能であり、おろかしい行為といわねばならない。それとも、知性のことなのか」

イーグはそこで言葉を切り、問いかけるように、ルーをみつめた。しかし、ルーは口をつぐみ、放心したような視線を地の一点に向けているだけだった。

イーグはしばらくルーを注視したのち、また話しはじめた。

「だとしたら、なおさら私には煩悩が理解できない。知性はこの世においてはきわめて異質なものだからね。知性をそなえているがために、万物は輪廻するというのは矛盾に思えるんだよ。じっさいには、知性体の名に値する生物の数はごくかぎられていて、輪廻の作動に支障をきたすにちがいないからだ。絶対数が不足しているからね……」

「……」

ルーはかたく口をとざしたままだった。民族学を専攻する彼女にとって、イーグの話は確実にデーターの数を増やしてくれる、いわば知識の宝庫であるはずだった。事実、この地に滞在した当初は、積極的にイーグの話をきき、そのデーターを分析したりもしたのだ。

しかし、いつからか、ルーのなかで学問にたいする情熱が風化していき、いまではもう自分が民族

学者であるということさえ、ほとんど想いださなくなっている。すべてにわたって無感動になり、その対象がなんであれ、興味を持続させるのがむつかしい。イーグの話もただもうわずらわしく、うっとうしいだけだった。

「私には輪廻という概念がもうひとつ理解できない」

イーグが言葉をつづけた。

「しかし、それもまた、ひとつの螺旋ではないかと思う。解脱という一点に向かって、輪廻の輪がしぼられていく。輪廻は回転し、中心点に向かっていくのだから……」

螺旋……ルーはふいにこめかみがズキズキと痛みはじめるのをおぼえた。イーグの属する種族にとって、螺旋は独特な意味を持つ概念のようだ。ちょうどキリスト教徒における十字架みたいに、いや、彼らの集合的無意識にしっかりときざみつけられ、ほとんど本能と化している点では、おそらくそれよりも強く、聖なる意味あいを持つ象徴となっているようなのである。

ルーもかつては、螺旋が彼らの種族においてなにを象徴しているのか、学問的に位置づけようと努力したこともある。しかし、精神分裂症的な無感動さにおちいっていき、この地にたいしても、イーグの種族にたいしても、さほどの関心をいだけなくなってからというもの、〝螺旋〟という言葉には、むしろ憎悪に似た感情さえおぼえるようになった。〝螺旋〟という言葉を耳にするたびに、自分が民族学者として失格であることを、はっきりと申しわたされているような気になるからだった。

こめかみの痛みがひどくなる。なんだか体が地の底に沈んでいくようだ——痛い。もう我慢できない。もうこんなところには一秒たりともいたくない……ルーはかるい立ちくらみを起こしたようだ。一瞬、眼のまえがまっくらになり、ハッと眼をみひらいたときには、イーグが心配そうにこちらの顔

をのぞきこんでいた。
「故郷へ帰ったほうがよくはないか」
イーグがさとすような口調でいった。「ここはおまえのいるべき場所ではない」
「もみの木……」
われ知らず、ルーは奇妙なことを口走っていた。
「……」
イーグはだまっている。だまって、ルーの顔を注視している。
「もみの木が欲しいの」
ルーは大きく息を吸い、こんどはゆっくりと、おちついていった。「どうしても、もみの木が欲しいの」
「どうしてかね？」
「どうしても」
感情がたかぶり、つい声がたかくなってしまう。イーグに説明するのさえもどかしい。どうして、こんな簡単なことがわからないの。野蛮人。この野蛮人が……
「もみの木がどんなものだか、わたしが説明するわよ。だから、お願い……わたしひとりの力では、もうもみの木を手に入れることができないの。わたしのために、もみの木をつくってちょうだい」
「無から有を生みだすことはだれにもできない」
イーグがしずかにいった。「たとえ、それが可能だったとしても、おまえにはできない……おまえはおまえの現実を直視することを恐れている。恐怖からは、なにも生まれてはこない……わるいこと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c